

養護教諭養成課程における看護基礎技術に対する SA (student assistant) と受講生双方の学びと課題

笹谷 絵里

本研究は、看護師の資格が取得できない養護教諭養成課程の看護実習Ⅰ（基礎技術）において、4回生がSAとして演習に参加することでの学びと3回生がSA (student assistant) からどのような学びを得るのかという学生同士（3回生と4回生）、双方の学びを明らかにするとともに、その、課題や問題性も明らかにすることを目的としている。研究対象は、児童福祉学科3回生で看護実習Ⅰ（基礎技術）を履修している3回生及び同学科4回生で養護教諭養成課程の授業を受講し養護教諭Ⅰ種免許状を取得予定の学生である。対象の3回生及び4回生SAに対して、授業終了後にアンケートを実施した。結果、受講者からSAの活用について多くが役に立ったと感じていた。一方、SAの質を疑問視する回答も見られた。回答のあったSAの4人からは、「指導するために勉強したことが学びになった」、「一緒に学ぶことができた」などポジティブな意見が回答された。

キーワード：SA (student assistant)、高等教育、アクティブラーニング、基礎看護技術

The purpose of this study was to clarify what was learned by fourth year students in Nursing Practice I (Basic Skills) (a school nurse training course in which nursing qualifications are not obtained) when participating as student assistants (SA), and what is learned from these SAs by third year students (the learning between third and fourth year students), as well as to identify problems and issues. Subjects were third year students in the Child Welfare Department taking Nursing Practice I (Basic Skills) and fourth year students in the same department taking the school nurse training course who planned to obtain a first class school nurse license. Subjects were given a questionnaire after class. Results showed that, while many students felt the SAs were helpful, some questioned their quality. The four SAs responded positively, with comments such as, "I learned a lot when preparing to teach," and "I learned with the students."

Key words : SA (student assistant), Higher education, Active learning, Basic nursing skills

1. はじめに

本研究は、看護師の資格が取得できない養護教諭養成課程の看護実習Ⅰ（基礎技術）において、4回生がSAとして演習に参加することでの学びと3回生がSAからどのような学びを得るのかという学生同士（3回生と4回生）、双方の学びを明らかにするとともに、その、課題や問題性も明らかにすることを目的としている。現在、多くの大学が授業の改善や授業評価など学生に対してどのように質の高い教育が実施できるかについて様々な取り組みを行っている。その中で、TA (Teaching

Assistant) やSA (Student Assistant) を雇用し、学生の授業を支援することが増加してきた（野波ほか2004、毛利2006、岩崎ほか2007、岩崎・久保田・水越2008）。通常、SAは授業準備等授業支援を実施し、TAは授業準備のほかにも学生の学びを支える役割を担っているが、多くの大学でTAは大学院生（博士課程前期課程・後期課程）の学生が採用されていることが多い（岩崎ほか2012:55-56）。だが、本研究の対象とする大学では養護教諭養成に関する研究科が設置されておらず、大学院生を雇用することが困難なため、4回生をSAとして雇用し、主に学びを支える役割を依頼した。

実際にSAを活用した授業について先行研究に目を向けると、Nadia Sellami et alはSAを雇用すること自体が受講生の積極的な学習意欲の向上につながることを明らかにしている(Nadia et al2018)。しかしながら、受講生は人間関係や役割の影響をSAから受けているため、SAの対応やアドバイスによって、授業においてスムーズな状況と行き詰った状況を行き来している。そのため、SAにはその状況を打破し持論を促進するための知識や技術、その場の状況に応じた適切な支援を実施できる能力を求められていた。一方で、知識や技術を持ち合わせていれば誰にでもできるものではなく、学生という立場からだからこその支援の可能性も示唆されている(時任2016:172)さらに、SAも自分自身も数年前は受講生と同じような不安や悩みを持ちながら受講していた先輩であり、そうした立場で受講生をサポートすることが不可欠であるとした。一方で、そのようなサポートをするにはSA自身が自分たちの活動を意味づけして最適なサポートが出来るようにする必要がある(伊藤・吉永2013:43)。このように、SAの場合は身近な存在としての「先輩」として経験が有用である一方、知識や技術がTAよりも劣るため、SA自身がなぜSAをするのかの意味付けとともに、受講生を支援できる知識や技術も求められていた。このような、SAの質について、中川正は三重大学での試みとしてSAとして雇用する前提として学生にキャリア・ピアサポーターの初級と上級資格の養成を行い、上級資格を取得した学生がSAに申請することが出来る体制を構築し、SAに質を担保することで学びの質を高める取り組みを行っていることを報告している(中川2015)。このように、「より身近な存在としてのSA」と「より深い学びを提供できるSA」というある意味相反する能力がSAには求められているといえる。同様に、Linda D. Lemeryは、SAの評価について、評価ルーブリックを使用し、SAの評価結果について、SAの評価と評価フォームのコメントコピーをSAと共有することでSAの能力の向上に役立ったとする(Linda2008)。このように、SAについて、雇用するのみでなくその活動の評価を客観的に実施することや適性を明らかにしていくことで受講

生の学びが向上するといえる。他にも、実験や実習場面でのSAの活用を向けると、Wei Wang・Lin Zhangは、生物学の実験では、詳細な技術指導が必須であるが、一般的に大学は学生を人的資源と見なしておらず、学生をSAとして活用することで、ボランティアではなく、正確な技術の伝承や高等教育資源を補完するという点で有用な試みであるとしている(Wei・Lin2010)。

次に看護系の基礎教育における研究動向に目を向けると、三重野愛子と山澄直美の研究によれば、2011年から2015年の看護技術に関する教育方法の動向を見ると、e-learning等ICT機器を活用した学習システムの開発や評価とともに模擬患者を導入した看護技術演習の評価や学生が援助者・被援助者を体験する看護技術演習の評価を行う看護技術の教育方法に関する研究が増加していることを明らかにしている(三重野・山澄2021)。その中でも、模擬患者の導入や学生が援助者、被援助者を体験し評価する教育方法の増加について、「教員は単なるマニュアルに沿った手技の実施ではなく、対象となる人々の存在を常に意識した技術の提供となるよう、現実に近い臨場感を演出する。このような事例の設定や模擬患者の導入、実習を想定した演習は、演習の次の段階となる臨地実習での対象への技術提供に向けた取り組みである」(三重野・山澄2021:31)として、より、実践に近い学びや実習という応用力が必要となる場への接続となる授業の重要性が述べられた。地域の一般住民の方を模擬患者としたこうした研究では、学生が普段関わるのが少ない年代の方とコミュニケーションを取ることで、コミュニケーション能力が向上することや地域貢献につながる面が述べられる一方で、模擬患者となる前の教育の時間が必要となることや同じ条件を持った方に参加してもらうことが難しいといった面が明らかにされている(石井ほか2019)。さらに、模擬患者の導入は学生のコミュニケーション能力や状況対応能力の育成にもつながり、地域の高齢者の方が参加することによって、高齢者の生活文化を知る機会となることで学びとつながるが、学生の持つコミュニケーション能力や積極的な姿勢、学習意欲によって学びに差があったことも指摘されている(岩崎

2021)。

学生のSAを活用した事例では、同じ学部の先輩がSAとして参加事例として、学生生活を振り返りながらアドバイスができた、さらに、SAには緊張せず質問できたなど身近な存在として機能した利点が述べられていた。一方で、SA自身が学生であるため、自分に余裕がない時には負担になることやSA自身の実習が重なると精神的につらいとの意見も述べられた(佐藤ほか2015、佐藤2019)。次に同じ大学の学生をSAとして雇用した技術演習では、コミュニケーションの大切さや患者の視点を学べた。だが、SAの能力に差があったことが述べられ、実際に看護やその環境を知る者が模擬患者となる方が学生の学びを深めるとされた(小松ほか2017)。これらの先行研究から、SAを雇用したことで学習効果が向上することは明らかになっている。一方、SAの資質や能力、またSAの負担についても示唆されている。

しかしながら、SA自身がSAとして授業に参加すること、また模擬患者として授業に参加することでの学びや成長は明らかにされているものの、授業の受講者とSAの実施者という双方の学びつまり、「相互的な学びや問題点」については十分に検証されているとはいえない。そのため、本稿では同じ学部、学科の4回生がSAとして演習に参加することで、3回生がSAからどのような学びを得るのか、SAは3回生からどのような学びがあるのかという学生同士双方の学びと課題を明らかにすることで、今後SAを活用する授業における基礎的研究としたい。

2. 研究方法

2-1 研究事例

本研究での事例は、E大学の養護教諭養成課程での授業である看護実習I(基礎技術)である。この授業では、養護教諭に必要な看護の基礎技術について講義と演習から取得することを目的としている。学生は4～5名で1つのグループとなり看護基礎技術を取得する。授業は、講義・教員によるデモンストレーション→練習の実施を1コマとし、翌週に演習を実施しSAと振り返り、ワーク

シートにまとめ提出する。この時、SAは各グループに1名配置し、アドバイスや学生のディスカッションが円滑に行えるようにサポートを実施している。また、模擬患者としてSAは参加しており、演習実施時には患者や保健室を利用する児童・生徒の立場からのアドバイスも求めた。

SAは、すでにこの授業を受講し単位を取得している学生で、将来養護教諭を志望していてSAを希望する学生とした。SAに対する事前指導として授業の概要とレジュメを事前に渡し、演習内容の説明を実施し、疑問点を質問する時間を設けた。他にも資料検索用のパソコンをSA用に準備し、必要時に使用できるように配慮し、さらに必要な資料の購入、貸し出しを実施しSAが事前に学べる機会を用意した。演習時も教員が統括として各グループの進行状況を確認し必要に応じてアドバイスを行った。看護基礎技術やアドバイス等の方法について、特別な指示は実施せず、SA自身の学びや経験を活かして3回生の学びが深まるように臨機応変な対応を求めた。

2-2 研究対象

研究対象は、養護教諭養成課程の授業を受講する3回生で看護の基礎技術に関する授業を履修している3回生及び同学科の4回生で養護教諭養成課程の授業を受講し養護教諭1種免許状を取得予定の学生である。2019年7月～8月にかけて授業を受講した3回生に看護の基礎技術の授業におけるSA活用についてのアンケートを配布した。アンケートの内容は、①看護実習I(基礎技術)におけるSAは役に立ちましたか、②SAの演習でのアドバイスは役に立ちましたか、③今後もSA(4回生)を活用した看護実習I(基礎技術)を行うほうが良いと思いますか、④通常の教員中心の講義・演習の方が良いと思いますか、⑤今後SAを活用する上での意見や要望についての5つの内容について分析を実施した。アンケートは、5段階評価とし、5段階評価の理由を自由に記述できることとした。質問⑤は、自由記載とした。

次に4回生SAに対して、授業終了後である2019年8月にアンケートを配布した。内容は、①SAをやってみての感想、②模擬患者および模擬学生を

実施してみての感想、③3年生の授業に参加することについて、④SAの実施前後で変化したこと、⑤自由記載(その他)の5つの内容について分析を実施した。記載方法は自由記載とした。アンケートの回収は8月末までと口頭で説明し、回収はカギのかかったボックスにて行った。

3. 倫理的配慮

アンケート実施時に対象者への研究概略及び研究への参加が自由意思であること、研究協力を拒否する場合や撤回する場合に不利益を被らないこと、無記名自記式調査のため、個人が特定されないことを口頭で説明し、調査票の回答によって同意とした。本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得ている(研究倫理2019-17号)。

4. 結果と考察

4-1 3回生へのアンケート結果と考察

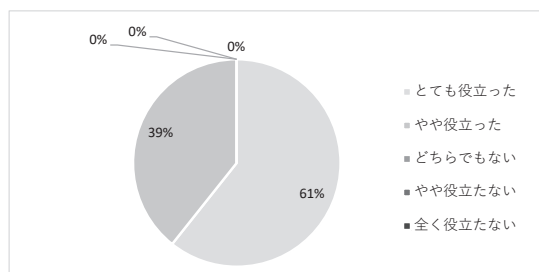


図1 看護実習Ⅰ（基礎技術）におけるSAは役に立ちましたか

まず、3回生へのアンケート結果をみると、受講者28名(100%)全員から回答が得られた。SAの活用について、質問①看護実習Ⅰ(基礎技術)におけるSAは役に立ちましたかでは、とても役立ったが17名(61%)、やや役立ったが11名(39%)、どちらともいえない、やや役立たない、全く役立たないとした回答者はいなかった。回答から、全員がSAを役立つ存在であったと考えていた(図1)。なぜそう思ったかの自由記述には、「患者役を通して感じたことや客観的に見て気づいたことを分かりやすく教えてもらえたから」、「1人1班で分からないことをすぐ聞くことで解決できた」、「実習時

に先生1人では全チーム見れないので、SAさんが見てアドバイスなどをもらえてよかった」、「SAさんが演技派で本格的な実習が出来たから」といった意見のほかにも「すぐに疑問点を聞くことが出来た」、「(実習といった)体験や経験に基づいたアドバイスがもらえた」といった、実習であるため細やかな指導が必要となる中、SAが3回生の疑問や質問に答えることで理解が深まったと考えられる。また、すでに実習を経験しているSAも多かったため、自らの体験に基づいたアドバイスが具体的に有用であったと考えられる。

②SAの演習でのアドバイスは役に立ちましたかでは、とても役立ったが18名(64%)、やや役立ったが10名(36%)、どちらともいえない、やや役立たない、全く役立たないとした回答者はいなかった。SAの存在とともに、SAのアドバイスについて全員が役立ったと考えていた(図2)。

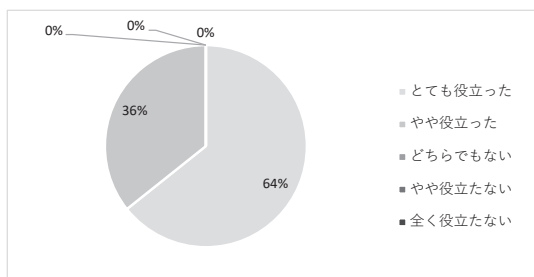


図2 SAの演習でのアドバイスは役に立ちましたか

自由記載では、①での記載内容と同じ意見も少なくなかったが具体的に、「アドバイスをくださったSAさんたちは、実践に役立つようなことを教えてもらえた」、「実際にやっているアドバイスだったので」、「ダメなところをすぐに指摘してくれるのがよかった」、「自分達だけではどうすればよいのかを考えつかないことまで教えてもらい考え方が増えた」といった、3回生だけではグループワークで深められない点についてもアドバイスによって理解が深まったとの意見が述べられた。一方で、「アドバイスを言ってくれるSAもいたが、あまり言ってくれないSAもいた」、「人によってアドバイス量が違ったり、やり方が違ったりしたから」とSAによるアドバイスに差があったことが述べられた。SAは演習毎に指導するグループを変え

てもらい、3回生に多様なタイプのSAから学んでもらう方法をとったが、アドバイスを受ける側である3回生にはSAの性格や質の差とらえた可能性も考えられた。

③今後もSA(4回生)を活用した看護実習I(基礎技術)を行うほうが良いと思いますかでは、とてもそう思う14名(50%)、ややそう思う12名(43%)、どちらともいえない2名(7%)、ややそう思わない、全くそう思わないとした回答者はいなかった。約9割の学生はSAを活用した看護実習の方が望ましいと考えていた(図3)。

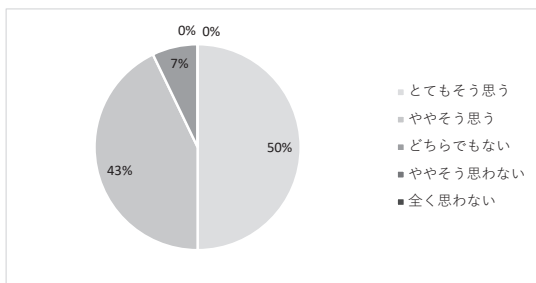


図3 今後もSA(4回生)を活用した看護実習I(基礎技術)を行う方が良いと思いますか

具体的な内容の自由記載としては、「空気がしまる」、「優しい先輩と話せてうれしかった」、「自分たちよりも様々な知識や経験を持っているSAさんと一緒に演習を行うことで具体的なアドバイスをもることができ、より知識や技術の取得が出来ると思うから」、「班ごとでは、先生だけでは見れないため、演習するのであればSAさんがいる方がよいと思う」といった演習という個々の習熟度を詳細に確認できることが大切な内容において、SAの存在は身近で相談しやすく、SAに見られているからこそしっかりと演習に取り組めたとの意見もあった。一方で、「(SAの)人による。コミュニケーション能力に欠ける方は助言をしてくれないため正直必要ない思った」、「やはり人によるから」というSAの性格やコミュニケーション能力による差があり、それにより学びに差が出るとの意見もあった。

④通常の教員中心の講義・演習の方が良いと思いますかでは、とてもそう思う2名(7%)、ややそう思う2名(7%)、どちらともいえない22名

(79%)、ややそう思わない2名(7%)、全くそう思わないとした回答者はいなかった。多くの学生がSAの存在を有用で学びが深まるとしながらも、教員中心の授業について約8割がどちらでもよいと回答した(図4)。

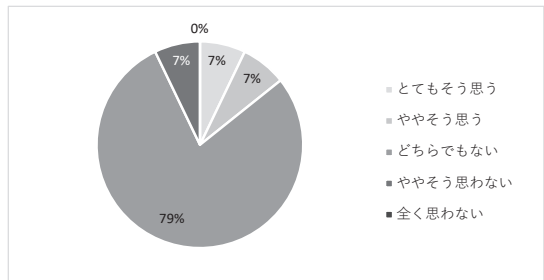


図4 通常の教員中心の講義演習の方が良いと思いますか

自由記載には、「このやり方(SAの方がいて)の方が身についた気はする」「4回生の方が年齢が近いので聞きやすい」「今回の講義はとても楽しかったので、このままの方が良いと思います。」と良かったことを記述している意見がある一方、「自分でやる方が身につくから」と講義の方が良いとの意見もあった。また、多くが回答したどちらでもよいとの意見として「様々なやり方を取り入れてみてもよいと思う」、「(教員中心)そちらもよいと思うが、SAさんがいたほうがわかりやすくよい」、「学生のやる気によります」、「どちらでもよいと思ったからです」といった意見が述べられた。質問④に関しては、他の自由記載よりも記述が少なく、どちらでもよいに丸を付けた回答が多く、教員が実施したアンケートであるため、質問①～③の回答からSAについてはポジティブに考えていることを明らかにしながらも教員に対して付度する思いから「どちらでもよい」が選択された可能性も考えられる。

最後に、自由記載として、⑤今後SAを活用する上での意見や要望があれば自由に記載してくださいとして、感想や意見を求めた。内容はSAに関するものとして、「SAさんのやる気に差があってやりにくかった」やSAに対する感謝として、「SAの方が授業の勉強の仕方を教えてくれました。ありがとうございました。卒業しても頑張ってください」、「詳しい説明をしてくださりありがとうございました」

いました。とてもためになりました」、「いい人が多くわかりやすく実習できました」が記述された。他にも「特になし」との記述もあった。質問①～④において、「なぜそう思ったのかについてお答えください」として、理由を尋ねていたため、意見や要望をすでに記述しており、質問⑤において意見があまり述べられなかったとも考えられる。

考察として、SAの存在は3回生の学びに役立つものだったと全員が回答した。理由として、多くのSAがすでに実習を経験しており、実際の保健室での出来事や実習での学びを3回生に具体的に事例として話せていたことがあげられる。これは、三重野・山澄の研究と同様により実践に近い学びにつながったという点と同様であった(三重野・山澄 2021)。さらに、Nadia et al が述べたように、SAを活用すること自体に大きな学習効果あるという点は先行研究と同様であるといえる(Nadia et al 2018)。また、身近な存在として話しやすかった、先輩が優しくかったなど、教員よりも距離が近く話しやすかったと回答された。これは、伊藤琴音・吉永一行の研究と同様に、SA自身、自分たちが学んだ当初に持った疑問点や不明点も含め3回生にアドバイスできたという点があげられる。このように身近な存在としての4回生(SA)はパティ制度と同様に学びを深める存在であったといえる(伊藤・吉永 2013)。さらに実習という授業形式の特徴として、細かな指導が求められるが、教員一名の授業形式の場合は一人ひとりに目を向けることが難しい状況にある。その点も、細かな指導という点においてSAの存在は重要であったといえよう。

実際に実験という習熟度が必要な場面においてSAを活用することで技術が向上することが明らかになっている(Wei・Lin 2010)。本研究でも、約9割の学生がSAを活用した看護実習が望ましいと回答しており、技術を取得する科目においてSAの活用は大学基礎科目でのアカデミックな学びのスタート支援という点でのSAとは異なる重要性があるといえる。一方で、SA(学生)の適性や能力について指摘する意見もあり、これは時任隼平が述べた知識や技能、さらに臨機応変な対応ができるといった適性が必要との意見と同様である(時任 2016)。そのため、今後、中川が述べるようにSA

を雇用する前提として基礎的な資格を取得したものを対象にするなどSAの雇用の方法を考慮していく必要がある(中川 2015)。

他に、本研究の研究結果として特徴的であったのが、多くの学生がSAの存在を有用であり、学びが深まったとしながらも、従来の教員中心の授業であったとしてもいいと約8割回答が回答した点である。従来のSAを雇用しない教員中心の授業とSAを雇用した授業を比較した先行研究は管見の限りなく、今後、インタビューなど質的調査を行い調査結果について検証していく必要がある。

4-2 4回生へのアンケート結果と考察

次に、4回生へのアンケート結果をみると、SA実施者6名のうち4名(67%)から回答を得た。回答結果は以下の通りである。

① SAをやってみての感想

- ・自分達の知識や経験で、3回生の力になれるか不安だったのですが、3回生の皆さんも優しく私達を受け入れて下さったので、微力ではありましたが、3回生をサポートする事が出来ました。また、自分の今まで学んできた知識や、実習等で体験・経験してきた事を、直に活かせる機会であったと思います。学んできた事だけでなく、もう一度学び直そうとする意欲も出て、学習内容を深めていく事が出来ました。
- ・SAをするのが初めてだった為、最初は多少の不安もあったが、始めてみるととても楽しく充実した時間を過ごすことができた。また、人に教えることで自分の振り返りを行うこともでき、自分自身の為にもなった。
- ・すごく自分自身も復習しながら、楽しくSAさせていただきました。先生から教わること、そして後輩からも教わることもありました。自分が知っている知識を相手にどのように伝えたらわかりやすいのか、どのように伝わっているのかなど実際に反応もみることができて、積極的に挑戦して伝えていけたかと思います。
- ・今までの授業を振り返る良いきっかけとなり、普段家で勉強する以上にSAの前日に予習するようになり、勉強になった。

以上のように、SAとなったことに対して概ね肯定的な意見が述べられた。また、当初は不安をもって臨んでいたが、3回生と接する中で自分の知識や経験が役に立ち、3回生をサポートする上での知識も必要となり、予習復習や知識の取得につながったと考えられる。

記述では最初、「不安」という言葉を用いて、知識の不十分さや能力について不安視していた。だが、実際にSAを行うことで既存の「知識の復習」を行う事や他者にどのように「わかりやすく伝える」ことができるかについて「予習」というさらに発展した知識を身に付けようとするなど教える側としてより「自分自身」が学びを深められたという事が述べられた。このように、SAを実施して自ら復習することで、不安を解消し、SAとして学びを深めていたことがわかる。

②模擬患者および模擬学生を実施してみたの感想

- ・自分が模擬患者及び模擬学生をしてみる事で、患者や学生は、養護教諭にどうして欲しいのか、何を求めているのか、養護教諭からの立場や目線で考えたものではなく、患者や学生からの立場や目線で考える事が出来ました。今までは、養護教諭側から、こう言う事が求められているであろうと想定するだけでしたが、実際に患者や学生を演じてみる事で、もっとこうしてもらいたい、本当はこういう声掛けの方が良いな等と患者や学生側の気持ちに気付く事が出来ました。演じる恥ずかしさ等は確かにありましたが、新しい発見や、気付きがたくさんあり、とても良い経験でした。
- ・最初は役になりきることが難しかったが、自分が本気で行わなければ3年生の為にならないと思ひ、最後までやり遂げた。また、事例はどれもリアリティがあり、養護教諭としての目線で状況を把握することや、対応すること等、様々な面において価値のある授業内容だと改めて思った。
- ・自分だけが知っている患者情報（結果）のため、それが実際ではどのように症状が現れるのか、人によっての感じ方の違いなど、1番考えてた時間でした。実際に患者自身でも、経験がある症

状のものだと「前もこうだったから」「ただの痛み」と捉えがちになると思います。そこをどのように違いをつけて、危険度をあげるのか。逆に、知識を得ている状態の自分がどのように演技で病状を訴え出していくのか、考えていた時間がものすごく大切な貴重な経験で、これからも必要な考え方なのではないかと今振り返ると思います。

- ・養護教諭役だけでは分からなかった声かけの重要性が分かった。また、もっとこうしてほしいなど自信をもった判断をしてほしいといった理想の養護教諭像が見えた。

模擬患者としての意見を見ると、振り返りでのサポートは養護教諭としての知識や技術が必要であったが、模擬患者の場合は患者や児童生徒としての対応が必要であり、養護教諭としてではなく、患者側や学生側に立って考えることができたこと述べられた。さらに、今まで気がつかなかった新たな気付きや将来の自分に役立つ経験だったとして、3回生との関りだけでなく自分自身の学びや気づきとなった点があげられた。

模擬患者・学生を演じることに「難しさ」や「恥ずかしさ」を当初、持っていたと語るSAもいた。だが、実際に模擬患者となることで、学生という立場だけでなく「患者」、「学生」という立場から相手（養護教諭役の学生）を俯瞰してみることで、「養護教諭」としての立場のみでなく、客観的な視点から、養護教諭の役割や重要性が理解できたことが模擬患者・学生を実施したことによる大きな利点であると考えられる。さらに、模擬患者・学生との関りから、よりこのような対応が望ましいという将来を見据えたイメージにつながっており、SAのみの活動よりもより深い学びになったと考える。

③3年生の授業に参加することについて

1) 良かった点、

- ・今まで学習してきた事を、声に出して伝える事で、私自身の振り返りや、新たな学習にもなりました。他学年との交流だからこそ、新たに気付く事があったり、違う視点で物事を見る事が出来たりと、同学年との学習とはまた違った気

付きがあり、考えをもつ事が出来ました。

- ・ 去年履修した授業の復習になる為、自分自身も勉強になった。また、3年生とも親睦を深められたこと。
- ・ 私は、後輩の授業に先輩もサポートとして参加していく形があることに賛成です。実際に、これまで先輩後輩という立場を経験してきたの意見です。先輩となった今、経験したことを伝えたい思いが溢れ「後輩という立場だったとき、(SA という存在) こんな存在があれば興味をより向けていただろう」という気持ちでいっぱいです。だからこそ、今回良かった点に全てが入ると感じました。
- ・ 自分達の学年とは違い、グループワークが上手く、聞いていて面白かった。学年が違うというだけでいろいろな意見が聞け一緒に学ぶことが出来た。

良かった点では、復習や振り返りになったという点とともに3年生と交流ができた親睦が深まったなど、経験を伝えられたことと共に、自分にも学びがあったことが述べられた。

SA 自身の学びとしては、「復習」、「振り返り」になったとの意見があった。さらに、他学年(3年生)と交流することで「親睦」、「一緒に学べた」など自分たちのみでは気づけなかった、さらに「深い学び」や「発見」があったことが述べられた。これは、SA が学びを指導や支援するだけでなく、受講生から自分自身にない意見や考えを知り学びになったという相互の学びがあったという事である。従来の先行研究では、SA は学習のサポートや支援を実施することに主眼が置かれていたが、本研究では、3年生(受講生)と SA (4年生) が関わることでお互いが学び合う相互の学びがあったといえる。

2) 大変だった点

- ・ 3年生から質問された事に、正しく、また求められている事を言う事が大変でした。分かりやすく言う事、伝える事を工夫するのも少し大変でした。
- ・ 考え方や受け取り方、理解度は個々によって違う為、どのような言い方が伝わるか毎回模索し

たこと。また、3年生の中でも養護教諭を目指している人とそうでない人によって授業に対しての温度差があった為、配慮しながら進めていかなければならなかったこと。

- ・ 伝える、などへのプレッシャーや積極性が活かされる部分だと思います。私にとってはプラスになる大変さばかりでした。
- ・ 具体的な内容を聞かれると勉強不足で教えることができなかった。

大変だった点として、自分自身に知識がなかったことや3年生にどの様に理解してもらえるように伝えるかに困難があったことが述べられた。

大変だった点として特徴的だったのが、「知識不足」「知識の伝達方法」の2点である。SA 自身が持っている知識が質問に答えられないなど、フィードバックできなかったことや知識があっても相手に「伝える」という事が受講生一人一人の知識、能力も違大変だったと感じられていた。その一方で、① SA をやってみての感想や③ 3年生の授業に参加することについて1) 良かった点、のように、授業以外で「復習」、「学びを深める」ことや「伝える」工夫を行っていくことで SA としての成長があったとも考えられる。SA を行う事での大変さを各 SA が「学び」に変えることで SA を実施したことを「良かった」として考えられる結果につながったといえる。

④ SA の実施前後で変化したこと(考え方や将来の進路など)

- ・ 人と議論し合う事や話し合う事の大切さを知り、自分一人で考えるのではなく、チームで考える事が、この先どんな時でも必要であり、大切であると思いました。一人で考えるよりも、チームで話し合う事で、幅が広がり、より良い対応方法等が見つかると思いました。また、その話し合いを外から見ると、新たな気づきがあり、その気づきを深めていける機会でした。同じ SA 同士とも話し合い等で仲を深める事ができ、また、他学年と交流をする事で、新たな視点からも見る事ができ、同じ事に対しても様々な視点から考えられるようになりました。一般企業に

就職しますが、どこかのタイミングで、養護教諭に限らずとも、子どもと触れ合える職業に就けたら良いと、改めて思いました。

- ・今までは教わる立場だったが、教える立場になってみて人に教える難しさを知った。また、自分が言った一言に3年生たちが影響を受けている場面を見て、改めて自身の言葉に責任を持たなければならないと感じた。養護教諭を目指すからには、一教員として児童・生徒を導く立場にあるので、気を引き締めていかなければならないと思った。
- ・就活しながらだったためすごく面接や試験に活かすことが出来ました。自分が、後輩にその場で考えて伝えていた事が面接にて答えられるチャンスが生まれていたり、SAの期間にされていた授業内容が試験にて出題されていたりなど、実際の保健室経営していく中で、対応していくことを試験に取り入れられた場合のものに、ものすごく心強いものでした。
- ・救急処置をもっと学び自信をもって行えるようにならなければいけないと思った。

実際のSAとしてだけではなく、就職活動や面接にこの活動が行かせたことが述べられた。他者と関わり相手にどの様にわかりやすく伝えるかという経験をしたことで自分の将来を見つめ直し、さらに、実際の就職活動など将来に向けての活動にポジティブな意味合いを持つことにつながったと考えられる。具体的には、「将来につながる学びになった」という点がSAを実施する前と実施後の変化が一番大きな変化であると考えられる。さらにグループワークという他者と一緒に話し合いをすることを「授業として話し合っている」という視点ではなく「チームとしてより良い課題解決」につなげるというさらに上位の社会において必要な知識として理解できたことも大きいと考える。他にも「言葉の責任」など、授業内の発言としてではなく、「人に教える、指導する立場」としての考えが述べられている点も単なるSAとしての学びではなく、4回生をSAとして雇用することでより自らのキャリアが明確になる「キャリアプラン」としても大きく影響していた。

⑤ 自由記載（その他）

- ・今回、SAを経験させて頂けた事で、多くの学びや気づきがありました。SAという形ではあれ、私の方がたくさん学ばせて頂いたと思います。楽しくSAも出来て、学習も出来て、とても良い機会でした。
- ・後期の間、SAをさせて頂いてありがとうございました。教育実習で何回か抜けてしまいましたが、最後まで参加させて頂いてだけでも楽しかったです。SAとしてどれほどの働きができたかはわかりませんが、SAで経験したことや学ばせていただいたことを今後活かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・貴重な経験させて頂き、ありがとうございました。3回生のためだけではない、自分のスキルを試し試され、さらに向上させていける時間でした。
- ・模擬患者やいろいろな道具を使い学ぶことで、将来に役立つ授業だなと感じました。

自由記載では、SAを体験できたことに関するお礼が述べられた。実際に活動を通して様々な経験ができ、結果的に学ぶことが多かったと述べられた。一方で、2名はアンケートのフィードバックがなかったため、アンケートの回答者は前向きで感謝を述べる回答が多かったとも考えられた。実際のSAの意見を見ると、「学び」や「気づき」に関する記述が多かった。また、今回、SAを選定する過程で個別に声をかけてSAを雇用した経緯があり、多くの人が「経験」できなかった貴重な経験と考えられていた可能性がある。今後、SAを雇用する場合には、先行研究で述べられたようにSAの選定や適性も含めた雇用方法を確立していく必要がある。さらに、実習で抜けたとの記述があるように4回生をSAとして雇用すると「就職」や「実習」でSAを実施できない期間が出てくることも少なくなかった。その場合、他のSAの負担が増強するとともに、SA自身も自ら就職活動や実習の合間に「学習」する時間を確保する必要がある、負担が少なくなかったと考えられる。一方で、4回生でSAを実施したことで「キャリアプラン」に接続する学びもあり、今後4回生SAをどの様に雇用

することが有用かを検討していく必要がある。

最後に全体の考察として、本研究の研究結果から SA の存在は 3 回生の学びにつながっていることが明らかになった。さらに、4 回生を SA として雇用したことで、身近な存在として知識、技術以上の「親しみやすさ」、「相談しやすさ」があったといえる。次に、SA 自身が授業に参加すること、また模擬患者として授業に参加することでの学びや成長について見ると、記述から明らかになったように「コミュニケーション」の大切さ、つまり「伝え合う事」や「相手にわかりやすくつたえる」という事が学びを深めるという事につながったという点は小松法子ほかの研究と同様である（小松ほか 2017）。さらに、伊藤・吉永の研究と同様に、3 回生をサポートしたい、支援したいという気持ちと共に「どのように伝えるか」「学びを深めるか」という活動の意味づけを行った結果、「自らの学び」につながったという点があった（伊藤・吉永 2013）。

一方で、本研究では、授業の受講者と SA の実施者という双方の学び、つまり、「相互的な学びや問題点」について明らかにすることができた。具体的には、3 回生のグループワークに参加することでの親睦や共に学ぶ姿勢である。3 回生からは、実際の実習や経験に基づいた身近な意見や親しみから SA から多くを学ぶことができたと言った全員が回答している。SA もグループワークや 3 回生の質問から自分たちのみでは気づけなかった、さらに深い学びや発見があったことが述べられた。従来の先行研究では、SA は学習のサポートや支援を実施することに主眼が置かれていた（野波ほか 2004、毛利 2006、岩崎ほか 2007、岩崎・久保田・水越 2008）。だが、本研究から SA は学びを指導や支援だけでなく、受講生から自分が持っていない意見や考えを知ることで、自分自身にも学びがあったという「相互的な学び」があったということが明らかになった。さらに、SA として活動を実施したことで、単なる SA としての学びではなく、自らのキャリアが明確になる「キャリアプラン」としても大きく影響していた。

他方で、佐藤亮ほか述べているように、4 回生は実習や就職活動など多忙な中 SA を務めることとなる。そのため、精神的に SA 業務自体が負

担となることも考えられた（佐藤ほか 2015、佐藤 2019）。実際に実習で SA として授業に参加できなかったという意見もあり、学生であるため自分の授業のほかに実習、就職活動と両立して SA を実施しなければいけないことから 4 回生を SA として雇用することでの負担の増強は考えられる。だが、前述のように実習や就職活動を行いながら SA を実施したことで、よりキャリアプランが明確になっている点もあり、今後どのような雇用形態が 4 回生を SA として雇用する上で有用かを考えていく必要がある。

5. おわりに

本研究は養護教諭養成課程の看護実習 I（基礎技術）において、4 回生が SA として演習に参加することでの学びと 3 回生が SA からどのような学びを得るのかという学生同士の双方の学びを明らかにすること、SA の活用における課題や問題性も明らかにすることを目的として実施した。結果、3 回生全員から SA は役立つ存在であると考えられていた。さらに、SA のアドバイスについても全員が役立ったと回答した。そして、約 9 割の学生が、今後も SA（4 回生）を活用した看護実習 I（基礎技術）を行う方が望ましいと考えていた。SA の活用について多くの学生が SA の存在を有用で学びが深まるとしながらも、教員中心の授業について約 8 割がどちらでもよいと回答した。従来の SA を雇用しない教員中心の授業と SA を雇用した授業を比較した研究について今後、インタビューなど質的調査を行っていく必要がある。本研究の結果、SA の存在や授業での支援について有用と考えている学生が多いことが明らかになった。一方で、自由記載において SA の質の違いや適性についての意見もあり、SA の力量によって学びの質に差が出た可能性が考えられた。

SA 自身も当初は知識の不十分さや能力について不安視していた。だが、実際に SA を実施することで既存の「知識の復習」を行う事や他者にどのように「わかりやすく伝える」ことができるかについて「予習」というさらに発展した知識を身に付けようとするなど教える側としてより「自分自身」

が学びを深められたという「相互的な学び」があったということが明らかになった。さらに、模擬患者・学生を演じることで、多角的な視野で考えられるようになってという点は大きな利点である。さらに、将来を見据えたイメージにもつながっており、模擬患者・学生を演じることでSAのみの活動よりもより深い学びになっていたといえる。

加えて、「将来につながる学びになった」という点がSAを実施する前と実施後の変化で一番大きなものであり、単なるSAとしての学びではなく、4回生をSAとして雇用することでより自らのキャリアが明確になる「キャリアプラン」としても大きく影響していたと考えられる。逆に、SAである4回生の場合、教育実習や就職活動の合間にSAを実施することとなり、人によっては負担となっていた可能性がある。これは、先行研究の佐藤他らによっても述べられている（佐藤ほか2015、佐藤2019）。今後、中川の先行研究のようにSAとして雇用する前に、SAとしての適性や本人の意欲などを確認することで、3回生にもより深い学びが提供できるのではないかと考える（中川2015）。本研究は、1つの大学での事例にとどまり一般化できない。今後さらに他大学の授業や演習以外の授業にも研究を広げ、学生同士の相互の学びの可能性について検討していきたい。

謝辞

研究の趣旨を理解し、調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

本研究は、2019年度花園大学学長裁量経費による研究成果である。

付記

本稿は日本看護研究学会第46回学術集会での発表内容に大幅な加筆修正を行ったものである。

引用文献

- 石井千春ほか(2019)「基礎看護学実習前の模擬患者(Simulated Patient)演習に関する研究(第3報)―演習に参加した模擬患者の満足度と傾向―」足利大学看護学部紀要7(1):45-56.
- 伊藤琴音・吉永一行(2013)「法学部「プレップセミナー」におけるステューデント・アシスタント(SA)の試み」高等

教育フォーラム3:39-43.

- 岩崎真子ほか(2021)「模擬患者演習での問診における看護学部1年生のコミュニケーションの工夫と学び」京都橋大学研究紀要47:173-184.
- 岩崎千晶ほか(2007)「高等教育における授業改善の支援体制とその取り組み」第23回日本教育工学会全国大会講演論文集:805-806.
- 岩崎千晶・久保田賢一・水越敏行(2008)「組織的な教員支援としてのステューデント・アシスタントの効果と課題」日本教育工学会論文雑誌32:169-172.
- 岩崎千晶ほか(2012)「関西大学における教育補助者を活用した活動、授業の実践動向の分析:学部生・院生の教育力活用制度の全学展開に向けて」関西大学高等教育研究3:53-67.
- 小松法子ほか(2017)「基礎看護技術教育における他学部SA参加型演習を通じた学生の学び」学士課程教育機構研究誌6:99-110.
- Linda D. Lemery,2008, *Student Assistant Management: Using an Evaluation Rubric* College & Undergraduate Libraries 15: 451-462
- 三重野愛子・山澄直美(2021)「看護基礎教育における看護技術の教育方法に関する研究動向―2011年～2015年に公表された研究を対象として―」長崎県立大学看護栄養学部紀要19:21-34.
- 毛利康俊(2006)「Student Assistant 制度の創設について」西南学院大学法学論集38:161-167.
- Nadia Sellami et al, 2018, *Implementation of a Learning Assistant Program Improves Student Performance on Higher-Order Assessments* CBE—Life Sciences Education 16 (4)
(<https://doi.org/10.1187/cbe.16-12-034120211012> 取得)
- 中川正(2015)「学生支援を組み込んだカリキュラムの構築―三重大学における教育質保障の試み―」名古屋高等教育研究15:23-38.
- 野波侑里他(2004)「大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係ステューデント・アシスタントの実態調査報告」大手前大学社会文化学部論集4:163-185.
- 佐藤亮ほか(2015)「臨床見学実習の新たな試み:長期臨床実習生をStudent Assistantとして参加させて」理学療法学 Supplement 2014(0)
- 佐藤亮(2019)「Student Assistant(SA)制度は長期臨床実習生を成長させるか―見学実習におけるSA制度の有効性に関する検討―」理学療法学 Supplement 46S1(0), D-28-D-28
- 時任隼平(2016)「アクティブラーニング型授業において受講生がステューデント・アシスタントに求める能力に関する研究」日本教育工学会論文誌40:169-172

養護教諭養成課程における看護基礎技術に対する SA (student assistant) と受講生双方の学びと課題

Wei Wang, Lin Zhang, 2010, *Discussion on establishing comprehensive student assistant system* 2010

International Conference on Optics, PhotonicSAnd Energy Engineering (OPEE) 2 : 484 – 487.